

④高プロラクチン血症

概念

プロラクチンとは脳の下垂体前葉から分泌されるホルモンです。別名「乳汁分泌ホルモン」といい、普通は出産後に高くなり母乳を出させているホルモンです。これが出産とは関係なく高い状態である場合を「高プロラクチン血症」といいます。

不妊症専門病院では生理中に必ず一度はホルモン採血をします。なぜなら生理中だと様々なホルモンが基礎値に戻り比較が可能になり判断しやすくなるからです。その際にプロラクチンも必ず測定します。なぜかという、プロラクチンは不妊症と密接に関係しているからです。高いと様々な問題を生じます。例えば乳汁漏出、月経異常、不妊症等があります。

原因

プロラクチンが高くなる原因として以下のケースがあります。

- ①プロラクチノーマ(プロラクチン産生下垂体腺腫):これは脳の下垂体前葉にプロラクチンをたくさん作り出してしまう腫瘍ができた状態の事です。原因では最も頻度が高く35%を占めています。
- ②視床下部性:視床下部とは下垂体をコントロールしている場所ですが、ここが障害されるとプロラクチンの異常分泌が起きます。
- ③薬剤性:普段飲んでいる薬が原因でプロラクチンが上がっている状態の事です。意外と見逃されやすいので注意が必要です。普段何気なく使用している薬が多いので問診をしっかりと見逃される事があります。プロラクチンを高くする薬は以下のようなものがあります。
a:向精神病薬(セレネース、トフラニール、ウインタミン)
b:胃腸薬(ガスター、タガメット、プリンペラン)
c:降圧薬(アルドメット、アポプロン)
- ④甲状腺機能異常:甲状腺機能が悪くてもプロラクチンは高くなります。なぜならプロラクチンも甲状腺刺激ホルモンも同じ下垂体で作られていて二つは互いに関連しているからです。

症状

プロラクチンが高い場合の症状ですが以下のものがあります。

- ①乳汁漏出:普段は母乳が出なくても入浴時等に乳頭を刺激すると数滴出る事があります。逆に大量に出る人は珍しいです。
- ②月経異常(無月経):高プロラクチンにより卵胞発育が抑えられ、排卵も抑えられます。黄体機能不全も起こします。その結果無月経になります。
- ③不妊
- ④頭痛、視野障害:下垂体腺腫による圧迫症状。

問診、検査

- ①現在内服している薬のチェック
- ②甲状腺機能検査
- ③頭部 MRI

問診で薬剤性が否定されれば、甲状腺機能を調べます。甲状腺機能が正常で、プロラクチン値が50ng/ml 以上の場合は頭部 MRI を行い下垂体腺腫があるかを検査します。

治療

プロラクチンが高い場合は下げる必要があります。

①プロラクチノーマ

薬物療法:まずは薬を用います。

一般的にはカバサル、テルロンを使用します。カバサルは週に1回、テルロンは一日1回内服します。副作用として吐き気、頭痛、立ちくらみ等が出るため処方開始時には十分に説明してから開始します。副作用を少なくするために徐々に増やしていったり、吐き気止めを併用したりします。両者とも妊娠が判明したら内服を中止します。

手術療法:薬物療法が無効のケースには手術で腫瘍を切除します。

②薬剤性の場合:原因となる薬剤を中止します。中止後2週間以内にプロラクチンは正常化します。

③甲状腺機能低下症の場合:甲状腺ホルモンを補充すると大体45日程度で改善します。

その他の問題点

潜在性高プロラクチン血症について:プロラクチンは昼間低く夜間に高くなる日内変動を示します。夜間に測定すると高くなるケースがあります。ホルモン負荷試験により診断できます。

男性でもプロラクチンが高くなると性欲低下、精子数の減少のような問題が生じます。

以上聞きなれない言葉でわかりにくい事ばかりですがプロラクチンとは不妊症ではとても大切なホルモンです。